

## 濱文庫の戯単（芝居番付）から見る京劇の全盛期

中里見，敬  
九州大学言語文化研究院：准教授：中国文学

<https://hdl.handle.net/2324/21871>

---

出版情報：2012-05-22. 九州大学附属図書館

バージョン：

権利関係：「隈とり図」および図1, 2, 6, 11, 12, 13, 14は、九州大学附属図書館のご厚意により、濱文庫所蔵の図画、写真、戯単を掲載しました。

九州大学百周年記念行事  
図書館貴重文物展示会ギャラリートーク  
濱文庫の戯単 (芝居番付)  
から見る京劇の全盛期



九州大学言語文化研究院  
中里見 敬

濱一衛画「隈とり図」  
(浜文庫/日文戯曲/21)

今回のギャラリートークでは、濱文庫の戯単(芝居番付)に出てくる俳優や演目を、当時の録音で鑑賞します。濱先生の文章による解説とあわせて、1930年代の京劇の唱やセリフをご堪能ください。

鑑賞するのは、以下の名優による4つの芝居のさわりの場面です。

- |               |         |
|---------------|---------|
| 1. 「汾河湾」(柳迎春) | 尚小雲     |
| 2. 「珠簾寨」      | 孟小冬     |
| 3. 「四郎探母・回令」  | 梅蘭芳、蕭長華 |
| 4. 「霸王別姬」     | 梅蘭芳、楊小楼 |

上の「隈とり図」および図1, 2, 6, 11, 12, 13, 14は、九州大学附属図書館のご厚意により、濱文庫所蔵の図画、写真、戯単を掲載しました。

# 1. 「汾河湾」(柳迎春) 尚小雲

## 1. 汾河湾 (柳迎春)

### 〔解説〕

元曲に『薛仁貴衣錦還郷』というのがあり、講史に『征東征西全伝』があり、そうしたもののから脱化して来たのであろう。薛仁貴が十八年振りに故郷に帰る途中、雁を射る子を過って殺したのが後に自分の子と解って悲嘆に暮れるという悲劇。此の芝居どちらかといえば老生の芝居であるから青衣の唱は多くないが、今日では旦が勢力を占めているので芸題も「柳迎春」と改めているのが多い。唱の面白いところは老生では仁貴が登場して「早くも到る汾河湾……」、審門の外で昔語りをして「身は絳忻県龍門の……」。青衣では迎春が丁山を見送って「そなたの父はたたかいの……」の辺りであって、特に老生の「身は絳忻県……」は聴き所である。大芝居は迎春が後審の掃除に行っている間に仁貴が男の靴を見て難詰するところから、代る代る気絶するあたり、所謂「聞審」である。今日北京では程硯秋、尚小雲の両頭目が常に演じている。程の相手役は王少楼であり、尚の相手役は王鳳卿である。

濱一衛著訳『中国の戯劇・京劇選』（花書院，2011）169-170頁より

### 〔鑑賞〕

柳迎春が息子・丁山に雁の獵に行くよういつける冒頭の場面。

柳迎春： 尚小雲（録音）、尚慧敏（配像）

薛丁山（子役）： 張鑫（配像）

1962年の録音にもとづき撮影

丁山登場。

【丁山、上場詩を念ずる】

父は長安に往きぬ、  
一たび去りてたちまち十八年、  
わがいえ  
寒審に我を生みおとし  
名づけて丁山とよぶ。

（丁山）忽ち母の喚ぶを聴き、歩を邁めて御前に到る。母上様。

（迎春）お坐りなさい。

（丁山）御免下さい。

（迎春）今日は天気もよい様なれば汾河へ行って魚や雁を捕るがよい。これで母子二人が露命もつなげようというもの。

（丁山）今日は参りませぬ。

（迎春）何故行かぬ。

（丁山）母上は御存じもないことながら、昨日はおもいがけなく青面あおづらの大男がわしを地べたに倒した夢を見ました。驚いて眼を醒ましたがこわさの余り冷汗をべっとりかきました。もう不吉とくしの夢見なれば今日は参りませぬ。

（迎春）年齒も行かぬに夢見が悪い等いうもおかしい。母がいうことまあお聴き。

【迎春、西皮原板で唱う】

そなたの父は戦いの 野に旅立ちし其の日より  
母はそなたが雁捕って 孝養こやう尽くすを頼むのみ  
弓矢や魚鰓うしほは渡せども 日の入る前には帰れかし



図1「汾河湾」で柳迎春に扮する尚小雲と子役

濱一衛著訳『中国の戯劇・京劇選』（花書院，2011）236-238頁より

## 2. 「珠簾寨」 孟小冬

### 2. 珠簾寨

#### 〔解説〕

浄（李克用） 花旦（二皇娘） 老生（程敬思）

五代残唐史演義卷一。故譚鑫培得意の出し物。唐の僖宗の時、功臣の第一に位した晋王李克用は、皇后の父を打殺した為め、僖宗皇帝に逐われ、沙陀国に奔ってその王になって居た。ところが唐では黄巢の謀反が始まり、唐帝は西岐美良川というところに逃げ出すさき。そこで李克用を赦して助けて貰うために、李と感情のよかった程敬思を沙陀国に送る。併し李は旧怨を思うて唐帝の請を容れないのであるが、程は李が王后二人を懼れている（つまり熈天下である）ことを知りウマク王后を抱き込んで李を圧迫し、終に援兵を出させる。既にして出兵するや、道に周徳威に会う。克用の神箭よく徳威を服せしめ、徳威終に降る。

波多野乾一著『支那劇五百番』（北京：支那問題社，1922）239-240頁より

#### 〔鑑賞〕

李克用が程敬思と再会する場面。

李克用： 孟小冬（女老生：女優が男の老け役を演じる）  
1931年長城唱片（録音）

#### 【李克用、西皮原板で唱う】

私はこれまでのいきさつを話して聞かせよう。  
思えばあのとき五鳳楼で、  
文武の百官たちが皇帝の長寿を祝っていた。  
その中に皇后の父・段文楚がいた。  
段文楚は私のことを礼儀をわきまえぬやつとバカにし、  
私は怒りのあまり頭に血がのぼり、  
段をひっつかまえ投げ捨てて、  
死なせてしまった。  
皇帝はお怒りになり私を打ち首にするという。  
あのとき分かれて以来、  
今日、再びここ北州で会おうとは。



図4 孟小冬



図2 「汾河湾」で柳迎春に扮する尚小雲



図3 「珍珠扇」を演じる尚小雲



図5 「珠簾寨」で李克用に扮する孟小冬

### 3. 「四郎探母・回令」 梅蘭芳、蕭長華

#### 3. 四郎探母・回令

〔解説〕

老生（楊四郎延輝） 花旦（鉄鏡公主） 正旦（蕭太后） 老旦（余太君）  
老生（楊六郎延昭） 小生（楊宗保）

北宋楊家将演義第四十一回に出たと思われるが、演義と脚本とは事実が異っている。楊継業の息七人は何れも驍勇の聞えあり。かつて御駕を奉じて金沙灘に会盟した折、四郎延輝は捕えられて遼の駙馬となり、鉄鏡公主と結婚してはや十五年も経った。風の便りに第六郎延昭が宋の元帥となり、母余太君が糧草を護って飛虎峪にいるという話を聞き、何とかして母に会いたいと思い鉄鏡公主に相談する。公主は母なる蕭太后から、理由を説明せずに令箭を借り受けて渡す。四郎はそれによって宋の営に行き、母余太君、第六郎夫婦、妻及び六郎の息宗保等に会う。併し二十四時間という約束なので長くいる訳にも行かず、又アタフタと遼に帰って来て、公主の手から令箭を太后に還す。坐宮、盗令、出関、見母、回令の五つの場に分れ、中でも坐宮の歌、見母の情節最もよし。綺麗で派手な大芝居でこれさえ演れば何時でも大入満員。もと譚鑫培、劉鴻昇の御得意、今では王鳳卿の四郎、陳徳霖の蕭太后、梅蘭芳の鉄鏡公主、龔雲甫の余太君、姜妙香の楊宗保、張春彦の六郎などで演ることがあるが、北京で見ることの出来る最も面白い芝居の一つである。

波多野乾一著『支那劇五百番』（北京：支那問題社、1922）254-255頁より

宋代、楊家の一門は打ちつづく敗戦に一家は大半衰亡し、楊令公の第四子延輝は遼王に捕えられ、その娘鉄鏡公主と夫婦になり子までなします。その後も宋蕭両国は交戦をつづけ平和の日は参りません。或日延輝は宋国の軍営に六弟延昭が軍を率い、母の余太君と共に来ていることを耳にして弟に会いたい思いにかられますが、両国交戦の折柄、通敵の疑いさえ持たれることであり、思い止まる外はなく憂の色が日毎に濃くなってゆきます。芝居はここから始まります。公主は心配して再三詰問するので、遂に真情を告げます。公主はその意を諒解してくれますので、四郎も必ず帰ってくることを誓います。翌日公主は太后に朝見し、一計を案じて懐中の子供を殊更に扭って泣かせ、子供が机上の令箭を玩具にしたいというを許さぬため泣くのですと言上すれば、太后は孫を愛するの餘り明日還すように命じて大切な分令を与えます。公主より令箭を得た延輝は欣然夜に乗じて関を出で宋営にゆき、母弟と会うことができました。第一段が坐宮、第二段が盗令、第三段が通関、第四段が探母です。

（補：第五段に遼国へ戻る「回令」の段がある）

……殆ど二時間もかかる大芝居です。よい役者が揃えば滅法面白いのですが、揃わなければあくびが出ます。譚派の老生は皆やりますが、唱做ともに甚だ演じにくいものです。今日では譚富英、奚嘯伯、孟小冬が最上です。先日天津で譚富英が四郎の嘎調（特別に高く唱い抜く、勿論うら声になってはいけない）に成功したとあって評判でした。青衣の旗装というのは満洲旗人の服装です。近来での大顔合せは民国二十四年(1935)十月の第一舞台で演ぜられた、孟小冬の四郎、尚小雲の公主、芙蓉草の蕭太后、李多奎の余太君でしょう。最近では国劇芸術振興会がやった合作戯の、奚嘯伯の四郎、南鉄生の公主という配役も立派ですし、開明で奚嘯伯と呉素秋の合作戯でやった役割も立派です。……

濱一衛著『支那芝居の話』（弘文堂書房、1944）179-182頁より



図6 「御碑亭」を演じる梅蘭芳

### 3.「四郎探母・回令」 梅蘭芳、蕭長華

〔鑑賞〕

宋の軍営で母と再会后、遼国に戻ってきた四郎を、太后は処刑するという。公主は四郎のために太后に命乞いをする方法を国舅（太后の兄弟）と相談する。

鉄鏡公主： 梅蘭芳（旦：女形）  
国舅： 蕭長華（丑：道化役）  
1934年勝利唱片（録音）

【鉄鏡公主、西皮搖板で唱う】

銀安殿に行くも夫を救うすべもなし。

（国舅） 公主様、この期に及んで呆然として、四郎殿を救う方法はないのか。

（公主） おじ様、事ここに及んで、私にはどうすればよいか、なんの考えもありません。

（国舅） 大事に至って、なすすべもないとは。

（公主） おじ様には、お考えがとおりでしょうか。

（国舅） そもそも通行手形を盗んで国境を越えたのは、どうやって思いついたのか。

（公主） それはこの子を使ったのです。

（国舅） では、いま四郎殿を救うのも、この子にさせてみなさい。

（公主） どうするのです？

（国舅） いい考えを思いついた。この子は太后さまが目に入れても痛くないほど可愛がっている。おまえはこの子を太后にあずけ、「もう生きていけない」「私は死にます」「首を切ります」と言って泣き叫びなさい。そうすると、この子はきっと泣いて、太后はこの子可愛さのあまり、許してくれるでしょう。

（公主） そんなこと、できません。この子を驚かせるなんて。私はこの子と離れられません。

（国舅） 思い切りの悪いこと。そうでもしなければ、四郎殿を救えなかりょうに。四郎殿を救えるなら、いまはこの子の心配などせぬがよい。

（公主） じゃあ、やってみる？

（国舅） そう、思い切ってやってみなさい。

【公主、西皮搖板で唱う】

この子は太后様にゆだねます！

おじ様、もし太后様が四郎を許して下さらなければ、私は生きていけません、生きてはいけません。



図7「選元戎」で程咬金を演じる蕭長華



図8 丑（道化役）の蕭長華



図9「女起解」を演じる梅蘭芳と蕭長華

## 4.「霸王別姫」 梅蘭芳、楊小樓

### 4. 霸王別姫

〔解説〕

武浄（項羽） 花旦（虞美人） 老生（韓信） 武生（張良） 末（李左軍）

漢の高祖劉邦は西楚の霸王項羽との争覇戦に韓信を元帥に命じた。韓信諸将を分けて兵を九里山前に駐屯せしめ、十面に埋伏させ、李左軍を詐って楚に降らしめ、項羽を死地に誘う謀が見事に成功して形勢は俄かに一変する。カ山を抜く項羽も、垓下に囲まれて二進むも三進も行かなくなった。漢の謀将張良又一計を案じ、月夜、崗に登って洞簫を吹き軍卒に命じて楚の俗歌を合唱させると長く他郷で戦いに厭き疲れて居る楚の将卒は望郷の念を起し、一夜の中に我れも己れも脱走し、纔かに八百餘騎となった。手も出なくなった項羽は愈と覚悟を決め愛姫の虞美人と帳中に置酒して最後の宴を張り別を惜む。『力拔山兮氣蓋世、時不利兮離不逝、離不逝兮、奈若何、虞兮虞兮奈若何』と詠えば虞美人劍を抜いてこれに和して舞う。舞い終って自ら刎ねる。敵陣を遁れて烏江まで来た項羽は江を渡らんとし、我が為めに江東八千の子弟を殺し、何の面目か有って父老にまみえようと嘆息し、蓋世の英雄も自ら刎ねて死ぬるといふ筋。四幕十二場から成って居て可成り長い物である。当代名優楊小樓の項羽、梅蘭芳の虞美人は最も当り役とせられて居る。

波多野乾一著『支那劇五百番』（北京：支那問題社，1922）53-54頁より

霸王項羽と其の愛人虞姫を中心として英雄の末路を画いた一篇。『史記』を通じて知らぬ人のない物語りである。今は伝らないが元の雜劇に『霸王垓下別姫』、明初に『千金記』あり、こうしたものより脱化して四種の中では一番新しい劇である。霸王は武生、虞姫は青衣とある。支那劇では役柄が専門化していて、霸王の様に立回り（武工）を主として唱、念、做を従とする役柄を武生という。先年故人となった楊小樓は武生の代表であって、梅蘭芳と共演の霸王別姫は高く評価されていた。

霸王は顔に隈を取っているから花臉ともいえるのであって、南霸王といわれている金少山（花臉）もよく霸王に扮して梅蘭芳に付き合っていた。今日霸王に扮する武生では周瑞安、孫毓堃、花臉では金少山、劉連榮等が上乘であろう。武生の声は本来の声のままであるが、花臉は気魄のある太い重々しい声であって、奸雄や快漢に扮し顔一面に面でも被った様に隈を取っている。虞姫に扮する青衣という役柄は気品のある優雅な女形で細い作り声で唱う。この青衣に反して淫婦や毒婦に扮するのが花旦で、唱の方には重きを置かない。梅蘭芳、程硯秋、尚小雲、荀慧生の四大名旦を花衫と称えているのは、青衣花旦を兼ね演ずるからである。

此の劇武生にも青衣にも仕所の多い従って全劇興味深いものがあるが、いつ迄も印象に残るのは「虞や虞や汝を如何にせん」の悲婉雄壯の念と、虞姫の起って舞う十二場の舞劍である、大鼓雲鑼等の伴奏で舞う虞姫の姿は天上のものかと疑う程である。

濱一衛著『中国の戯劇・京劇選』  
（花書院，2011）167-168頁より



図10 時装戲「一縷麻」を演じる梅蘭芳 ©梅蘭芳博物館

## 4.「霸王別姫」 梅蘭芳、楊小樓

〔鑑賞〕

負け戦を覚悟した項羽は、虞姫と最後の宴を張る。クライマックスに至る場面。

虞姫： 梅蘭芳（旦：女形）

項羽： 楊小樓（武生：立ち回りのできる男役）

1931年長城唱片（録音）

【虞姫唱う】われ大王に随いて 東に征し西に戦い

風、霜受けてともどもに 労苦の年を過しけり  
ただ恨めしき秦国の 生民無道に陥し入れ

百姓困苦につまづける

【霸王唱う】九里山に 大陣十面に伏せたれど

魏豹に会いしそのために 我を放して逃れしむ  
後営内に到りなば 馬より下りて我れ行かん  
御妻に会いて此の度は 詳さに明けく語らなん

（虞姫）大王様此の度の御いくさ、勝負の程は如何にござりましょう。

（霸王）かの韓信十面に兵を埋伏したれば、余は九里山に困しめられ、誤って危地に入り、戦い抜きて鎧甲も失いしが、幸いに魏豹に会い、我を逃がし陣を出だしてくれたれば、辛うじて陣営に回った。蒼天よ、天よ、料らざりき余が五載の勲功もついに流水に付さねばならぬとは。

（虞姫）大王様、悲嘆に及びましょう。古より勝敗は兵家の常とか申します。わたくしも美酒を備え居りますれば、大王様には一献お傾け下さりませ。

（霸王）内侍よ。

濱一衛著訳『中国の戯劇・京劇選』（花書院，2011）194-196頁より



図11「霸王別姫」で項羽に扮する楊小樓



図12「霸王別姫」で虞姫の舞剣を演じる梅蘭芳



濱文庫の戲單

# 華樂戲院

新戲 雲新授 富連成 金瓶女 最近

先期 票售

◀ [橋小口魚鮮] 天 (社慶重) 白 [外門前平北] ▶

(日期星) (日三月三年四十二歷國)

夜八號 戲 尚小雲 漢妃明

<p>何 雲 小 尚</p> <p>秋 雅 于 張 慈 范 高 扎</p> <p>徐 賈 多 仙 蓮 彥 春 泉 瑞 亭 寶 遠 富 奎</p> <p>甫 才 多 仙 蓮 彥 春 泉 瑞 亭 寶 遠 富 奎</p>	<p>王 尚 袁 張</p> <p>卿 鳳 雲 小 海 世 溪 雲</p> <p>小 客 申 柳 戰</p> <p>春 迎 城 宛</p>	<p>特煩重演 千古美人 纏綿香艷 一段佳話</p> <p>▲漢宮秋▲帝后 漢宮秋▲毛后 漢宮秋▲王后 漢宮秋▲王后 漢宮秋▲王后 漢宮秋▲王后</p> <p>▲埋香塚▲君玉 漢宮秋▲王后 漢宮秋▲王后 漢宮秋▲王后 漢宮秋▲王后</p>
<p>(五) 扇 珠 扇</p> <p>珍珠扇唱工 繁重數倍 藝員又研究 無數新腔 珍珠扇的配 角向藝員再 三選擇故得 珠聯璧合純 熟無比。</p>	<p>(三) 珍 新</p> <p>珍珠扇劇中 對於三角戀 受情形描寫 得十分透澈 臨時的馬 並在那房忽 然發生產子 問題真是滑 稽極矣諷刺 百出。</p>	<p>戰 宛</p>

全體學生 最近新排

漢十六劇 大跑竹馬 美服盛飾 先期售票

圖13 1935年3月3日 華樂戲院 (浜文庫/集181/122)

## 第一舞台 外門陽正

售票處 農工銀行南城辦事處 前門外珠市口 電話南局二〇三〇號

第一舞台 前門外西柳樹井 電話南局六六〇號

### 山東水災籌賑義務夜戲

應十月五日(星期六)第一舞台義務夜戲

目價

頭級座前四十元 正前十排 六元東

頭級座前四十元 正前十排 六元東

二級八座前二十四元 後五排 二元

三級八座前十六元 後四排 一元

二層樓東散座二元

二層樓西散座二元

二層樓正面散座一元

三層樓散座 前三排二元 後四排一元

鐵龍山	探母回令	坐樓殺惜	賽太歲	文章會	轅門斬子	穆柯寨	武文華	白良關	戰太平	百壽圖	大賜福
楊小樓	孟小冬	于連泉	馬連良	郝臣壽	朱森菊	齊雲龍	劉雲龍	王奎榮	羅華英	羅華英	羅華英
劉雲龍	楊春龍	張樹田	高富遠	李多奎	孫前亭	李多奎	于連泉	于連泉	于連泉	于連泉	于連泉

三五四一局東話贈印行紙洋興永南樓牌單東平北

圖14 1934年10月5日 第一舞台 (浜文庫/集181/42)